



アラン

ーノルマンディー人
のプロポV
【2014年10月号】

翻訳：高村昌憲

私はあなたに、精神病棟の中で自然に行われている実験心理学の講義を想像するようにお誘います。というのも狂人たちは、自らの処に齎されたような思考に委ねるしかないからです。理性的な人々は真実に沿って思考を立て直し、パオロ・ラスタ教授が多くの研究論文で十分証明したように、証拠だけが何も偽りのないものです。

その頃、その優れた教授は何らかの事件に邪魔されていました。そして全く無名でしたが実力は十分にある礼儀正しい代理人である謙虚な人の処に来ました。彼はパオロ・ラスタ教授の後任者になるつもりはないが、それでも可能な限り一人か二人の狂人を生徒たちに示しに行くことを前もって説明しました。従って彼はデュランとかデュボンという名で、狂気のせいでアンリ四世という渾名で大変に礼儀正しい男を来させました。大変に賢明なその代理人の男は、物を数えるように記憶によって語るように、閉じられた箱に整理されている順序に従って言うように、そしてつけ加えて増やすことさえあるように、或る些細な問題を幾つか提出していました。でも、この狂人は注意深いあなたや私と同じ位に、正しいことを応えます。まるでその様な状況の中に全てがあり、彼の答えによって先生の名誉になるようなこともあり、時々には二スーの煙草とか沢山の砂糖菓子を持って来ることもあります。結局のところ、彼は何にでも決して脱線しませんし、練習にもこと欠きません。でも、そのことが照明しているのは、狂人は当てに出来ないということです。

一週間後になると、パオロ・ラスタ教授自身が来しました。そして彼は生徒たちがアンリ四世を理解したかどうかを尋ねた時、その狂人は大変に賢明であっても、生徒たちは否と言いました。実験心理学の記録を提示するには大変に難しいと彼らは説明していました。しかし、教授はそれ以上聞きませんでした。教授はアンリ四世を呼び寄せて、非常に大きなドアを開けさせて言いました、「今日は、アンリ四世。戦争へ行かないのですか。あなたの兵士たちは何処にいるのですか」。敢えて言うなら、彼自身を狂人に立ち帰らせて、結局決まり切って望みどおりに戯言を彼に言わせることは別の話です。それは立派な催しでした。結局は自発的な行動の中に、人間の精神を観察することが出来るのです。というのも、良く思考する人間が世論の喜劇役者でないなら、何なのでしょう。彼自身の周りとか、良い書物の中から真実を探し出すのでしょうか。結局のところ、思想は生まれつきの状態のように思えてきて、事実のように如何なる手管もないように思えて来ます。ラスタ教授は決して干上がりませんし、筆は進みました。そこから学生たちは、理解可能な多くのことを学びますし、〈代理〉から〈正規〉までの教授のあらゆる相違を超えていました。

(一九一四年一月十二日)

九十二 サヴェルヌ (SAVERNE)

サヴェルヌ事件 (1) のことを言わない人はおりません。「駄目だ、私たちはプロシア人将校のブーツの匂いを嗅ぎたくないのだ。だから武器を取れ、剣を手にしろ」。他の人々は言います、「それがドイツだ。それが彼らの法律であり、裁判だ。その心は俺たちのものではない」。それは結局、両国の国民は自然と敵になっています。何故なら、非常に相違しているからである、ということになります。

私にとっては、ここにもあそこにも行っている軍隊の階級制度を、決して相違しているものと理解していません。そしてドレフュス事件と同時に多くのドイツ人は、私たちが今裁きたがっているように私たちが裁きたい、とっていると私は想像しています。大衆はぶつぶつ不平を言いますが、将校は強靱な意志と証拠のために勇気を発揮して、大衆を制圧する考えで振り返ります。これらの動きは、ゾラの裁判が行われている時にありました。あの頃は私たちの心の裡のようなものです。民主主義は抵抗しますが、苦痛がない訳ではありません。民主主義は何度も勝利することになりました。軍事独裁は、我が国のようにあちらの国でも脅迫します。それは独裁者たちによって支えられているのではなくて、私たちが支えているのです。普通法は軍隊組織と敵対関係にあります。包囲された状態は、屢々平和状態を妨げています。同じ軍隊精神と政治目的が、両国の中で影響を及ぼしております。お互いに敵対しながら、両国はお互いに模倣しています。各々の国が、相手の国へ遠方から単純化されたステレオ・タイプの印象を送り返しています。それらは、国内の戦いでもお互いに学ぶことができます。

ドレフュス事件の時代に、私は軍隊精神を非難することよりも理解するようにしていました。軍人の〈栄光〉と〈服従〉は正しい姿勢であり、大変に意味あることです。服従する意志は人間を単純化させます。自らの権利を犠牲にすることは、〈権利〉を忘却させるようになります。そこから〈正義〉の精神が確かなものになりますが、消極的です。権利はその中にありますが、国家防衛という高度な意味においては如何なる権利もありません。そしてそれは共通の従属により、一種の平等を生んでいます。彼らは尊大な人間たちであり、何ら疑うこともなく、上品で高貴な人生を送っていますが、議論することも試行することもあります。その思想は何時も軍職に表れて来て、権利の要求を大変に小さなものにして仕舞います。それに反して〈権利〉を支配したり、行動を阻止したり、組織を作ったり、自分自身や自分の周りにそれを感じ出すや否や、それは快い酔わせる何かになります。この途方もないゲームは、心の糧になります。帝国主義の典型を養成します。その怒りは番犬のようなものです。あなたは、それに噛み付きたくなくなります。彼が噛み付いても驚かないで下さい。

避けられないで、何時も蘇る独裁に抵抗するには、剣を取り出すのは狂っています。というのも私たちが隣人の家で大変厳しく判断するのと同じに、この精神を私たちの家で養いたいことでもあるからです。というのも、そこには勝利の果実があるからです。勝利者たちは彼らの家にいるのであり、私たちの家にもいたのです。征服というものは、征服される者に自由を失わせ、征服する者にも自由を失わせます。この相違に対して、勝利者は〈強さ〉を崇めます。そして、そ

れが彼を奴隷にするのです。

(一九一四年一月十五日)

(1) 一九一三年十一月に、アルザス地方にあるストラスブールの北西方にある町サヴェルヌで幾つかの事件や排独主義者たちのデモが原因で、ドイツ軍に徴募されたアルザス人兵士たちが、フォルストナー陸軍中尉から侮辱された。一月五日、ストラスブールで、この中尉は厳正に禁固五日を命じられたが、彼の連隊長が無罪にさせた。この寛大さに対してフランスの新聞は破廉恥であると書いた。

人権擁護連盟の会長フランシス・ド・プレサンセは、私が見る処では下らない人物ではなく、尊敬出来ます。皇帝とか王とか何でも構いませんが、比べようがないくらいに私は高く評価しています。何故なら皇帝とか王は権力しかないので、彼には権利だけで力を持ち、精神だけで力を持っているからです。彼が不正に反対する力でそれを発見するのは、両眼だけであるからです。理性の光による力であり、真実による力です。あらゆる問題について義務しか認めない人は、可能な限りの真実を求めるものであり、そしてそれを公にして、それ以外の別の権力を何ら考慮しません。そしてそれが大変な精神的力になるのです。或る人々が、それはもうそれ以上ないと言っていた間に、他の人々は未来がそれを誕生させると理解して、それが生まれ、私たちの間で大きくなったのです。そうです、精神の〈共和制〉、生きた手本、人への働きかけは存在しています。

その会長は崇高な職務に相応しい人でした。少なくとも誰もがその印象を持っていますし、その角張って均斉の取れた顔を知っていて、〈法律〉の象徴でした。私は近頃、裁判官中の裁判官である彼を近くで見ました。難攻不落の塔のようです。眩しい光を恐れて、良く言われていたようにその両眼は時々閉じられますが、灯台のように見事な視線を見せて周りの全ての物に広がって行きます。如何なる失望の影もなく、如何なる卑しさもありません。それについて何の後腐れもありません。正しい裁判のために軽蔑しなければならないことや、思い出さねばならないことがあるのが正義です。美しき沈黙ですし、次は完璧なる形式です。十年前からこの人物は殆ど弱者のためにしかものを書きませんでしたし、権力者たちに反対して来ました。私は彼を崇拜しました。私にとっては稀有な感情でしたが、気持ちが良かったことを敢えて言います。私の友人たちは、私たちが誰よりも信心深くないとは少しも言いません。少しばかり気難しいだけなのです。

彼には神々はおりません。英雄もおりません。そのことだけは分かります。そして講演の後には、本来の関心事や愛情や称賛という全く自然な愛に従うことを行うしかない多くの人々がおります。彼らは、些細なことが全て人間のより高度な関心に従うことになります。私は崇拜するのを愛します。しかし、彼らの高邁な演説は、まさしく最も明白なものの関心と結び付き、気に入られようとする人と彼らの意見が一致することに気付かずにはられません。要するに、彼らがずる賢い仲間でも何時もお金持ちを尊重して、何時もその時の噂に流されて、何時も陰謀の渦中にいて、何時も成功者の後を追いかけて、結局は権力というものの追従者になった時、彼らの行いを別な風に語るようになることはありません。彼らは自由であると私は理解しますが、強制されてもいません。実力があって勝ったのではなく、力に屈しているのです。この英雄は大変に簡潔でしっかりしていると私は考えたいのですが、彼は自分の内と外であらゆる自然の力に勝ったのです。もっと適切に言うなら、決して戻らないように橋を切断したのです。奥深い英知は、英知さえも信用しないものです。

(一九一四年一月二三日)

九十四 再びノルマン・アンジェル (ENCORE NORMAN ANGELL)

『大幻想』の中でノルマン・アンジェルが分析した最も驚くべきことの一つは、ドイツにとってもフランスにとっても五十億フランの支払いを続けている経済状況のことです。「十二か月後に、賠償金の最終支払いをした私たちは、パリよりも高いベルリンの割引率を理解した…。一八七二年から一八七七年の間に、ドイツ公認の貯蓄銀行の預金は約二十%減少し、それと反対に同時期のフランスの預金は約二十%増加した」。二つの相関的なそれらの社会現象は、同時にドイツにおいても注目されている処です。「社会主義の異常な発展とその流れは、亡命者を生んでいる」。今後は一八八一年のビスマルクの言うことを聞くことです、「フランスと比較されたドイツの成長と苦境で私が最初に打ちのめされたのは一八七七年の頃である。私は国全体の満足感の減少を目撃した。労働者や商人の全体的状況が一般論として、大変に悪い状況の中で悪化していると私は理解した」。或るドイツの経済学者は一八七九年に次のように書きました、「せめて我々は戦争を前にした状況に戻れば良かったのに。しかし、給料は減り物価は値上がりしている」。ノルマン・アンジェルは次のように結論を下しております、「実際にお金の大洪水は、ドイツ人にとっては塵や灰という雨でしかなかったのだ」。そのことは他のことも多く証明していると私は要約します。

結局のところ、そこには事実の連続しかないが、この天文学は非常に複雑で、遠くから考察しないでそれだけ益々近くにいても、基本的な原理を解明するのに有利な訳ではありません。しかし、真の豊かさを生むに違いない思想と一致した連続は、労働や研究から生まれるものです。お金を遣って生まれるものではないとも言わなければなりません。

戦争賠償金は、主として戦費国債を償還することを目的とし見做そうとしています。しかし、それは意味がないのは明白です。燃えた火薬、破壊された施設、失われた労働の日々、負傷し死亡した人々、それらは賠償することが不可能な損害です。お金では何にもなりません。それはお金のために人々を働かせる権利でしかありません。そして、そのお金でドイツが我々の国を購入出来たのは明白で、産業そのものの発展を妨げたのも明白です。しかしドイツは、そのお金を残してあると仮定してみましよう。その巨額のお金は、物価の高騰しか齎しませんでした。いずれにせよ、五〇億フランという巨額な支払金は、実際の交易に対応しませんし、戦勝国にとっても自然により大きなリスクが経済関係を非常に混乱させたのです。何故なら、自分をお金持ちだと思えば思う程、慎重でなくなるからです。戦争賠償金によるよりも、平和という交易によって、国はより確実に豊かになると、これらの考察から理解させてくれています。

(一九一四年一月二四日)

九十五 不安定な見解 (INSTABILITSE D'OPINION)

私は昨日、皇帝とか領事とか執政官を予言し、ついには議会制度の破綻により政体の変化を予言した或る社会主義者が書いた『瞑想録』を読みました。右翼の反政府運動家であるちびのブーランジュ運動家は、頭の中で推敲しています。そして、その不安定な精神は、国家や自分自身の表面で生きている彼らにとっては珍しいことではありません。私は、ラジウムの発見が地面に全肉体を投じることを進んで信じていた人々と比較します。彼らには論争を好む性格があり、破壊と否定によってしか学びません。そして彼らの考察そのものの歩みは、彼ら自身による反証です。彼らの意見は、少し気分的過ぎます。王女と芸術家の結婚に少し似ていて、直ぐに離婚して仕舞います。怒ったり仲直りしている狂躁病者たちが何時も誠意があっても、理解するには誰もが大変に滑稽であるのを知っていました。

その現実の文化の要素の一つは、確かに沢山の事柄を皆が知る時には余りに雑なものになります。それは情熱に関する認識です。一人ひとりの精神は真の思想を自然に示す羅針盤のようなものであるのを、人は心の中で信じています。しかし実際に私たちは、そんなにも恵まれた状況にはおりません。月には一匹の動物がいるという寓話をあなたは知っています。それは望遠鏡によるものでした。そして私たちの自然という望遠鏡は、蠅で一杯であると言わなければなりません。

従って自然の判断には反省も批判もなく、私たちを自然に間違いへ導きます。そしてその提案そのものが気難しい人間の眼に入り、何時も最初から逆上した動きをするなら、次のように言うことになります、「何もかもが疑問であり疑わしい。私の理性は少なくとも私の思考を調整していない。しかし如何にして共同生活を調整するのだろうか」。そして、それは既に気分の動きでしかありません。

腕時計を修理するには忍耐が必要です。しかし、もしも腕時計の歯車も短気だったなら、どうなるのでしょうか。私たちの思想にとっても同じです。引きつって、緊張して、激しく震えている難解な思考があります。それは煙の中や三脚台の上で戯言を言っています。それは雄弁家であり、ほろりとさせ、説得力があります。しかしながらその場合は、正確な足し算を行っている訳ではありません。その時、〈賢者〉は肉体の動揺を認め、忍耐のための小さな労働を自分に与えます。思考は殆どなく、修整するとか園芸をするようなもので、内心の神託は何もないと見做して、反対にゆっくりと持続して冷静で均斉の取れた思考に期待します。そこでは独自の見解を見分けることが出来ます。真実を手に入れるには、策を弄し、待ち伏せした場所で銃を撃つために動いてはならない、とイギリスの哲学者ベーコンは言いました。しかし、それは少し言い過ぎです。というのも、それらの見解に狙いを定めると、最も動きが少ないことが森林に活気を与えるからです。宗教的で神聖な踊りは、見る者を妄想家にします。あらゆる動きが予言者的です。反撃をするそれらの激しい見解や熱い演説を、順次消さなければなりません。夫が妻を判断出来るのは、煙突が煙を出しているように熱くなっている時ではないのです。

(一九一四年二月一日)

私の友人たちは最早〈暴力〉を全て許さないようにならなければなりません。彼らが本気になって労を厭わないで言っている時は、何であろうと信じて貰えます。しかし、彼らが全く単純に荒々しいのは明らかです。怒り始めると人は何時も労を厭いません。最も労を厭わないのは狂人です。何も彼を止められません。私は、他人の苦しみよりも自分の苦しみを考えないようになっている彼を称賛します。しかし、その様な彼を評価するのは合理的ではありません。彼は同情されますが、それを隠さなければなりません。

私は、田舎で生活している老いた将校と知り合いになりましたが、彼は負傷し、捕虜となっても立派に務めを果たし、誰もがするように脱走しました。彼は戦争が好きではありませんでした。暴君も同様に好きではありませんでした。彼は暴君のようなところは少しもありませんでした。幼い子供たちには優しく、誰にでも謙虚で、親切で、時々は孤独ですが、少なくとも権力には近づきませんでした。多くの事柄に寛大で、非常に誠実でした。以上のとおり、彼は真の英雄です。私が喝采する人ですが、彼はその喝采を受け入れません。彼には羞恥心があり、それが勇氣ある人の魅力になっています。私の感嘆は、磁石の針が北を指すように、そこに向かっていきます。しかし私は悲劇役者が嫌いです。真の英雄が喜劇役者として名を高める権利があるという気持ちは、彼にはないと私は思います。劇場で流す涙は、劇場だけのものです。あゝ、レグルスよ。下らない詩人ホラティウスは、最も美しい詩の中で、この誠実な偉大な人間を上手く表現していました。捕虜たちの交換をローマで交渉するためにやって来たレグルスは、もしも上手くいかなかったなら、拷問されて死ぬのは確実でしたが、その交換を拒否するように忠告したのは知られています(2)。「死刑執行人が彼の準備をしていたことは知っていた。それでも彼は子供たちや国民から遠く離れて、一日中公共広場で裁判をして、ダラントとかヴェナーフルの館へ戻る人間としてそこへ引き返したのだ」。

そこには市民がいます。しかし、兵士は全く違います。軍人精神を持っている彼は全てが許されており、法律も正義も平和のための仕事も裏表のない美徳も、最早期待しません。何故なら彼は死者を軽視していたからです。それは余りに高尚な感情に高めることであり、誰もが結局は育成しなければなりません。彼も可能なものとして身に付けています。そして、この曲がり角における困難と美は、金貨を投げる博徒のように他人の人生と一緒に自分の人生を決して賭けないことです。それは見知らぬ英雄たちに押されて、辛うじて事が運ぶ秩序に耐えることです。それは他人が生きるのを許すことであり、結局のところ人間たちは掘り出したり鋤いたりすることに、怒りが極めて正しい時には、同意するのを許します。戦争は困難であり怒りも困難である、と良く言われていました。それは平和も困難であるということです。そして私たちは皆死ぬのです。

(一九一四年二月十日)

(1) ポール・デルレード (一八四六～一九一四) は、愛国者同盟の結成者で、クーデターを企てて国外追放された (一九〇〇～〇五)。

(2) レグルスは古代ローマの将軍で、第一次ポエニ戦争中の紀元前二五六年にカルタゴ人に捕らえられた。

力の勝負においては、偽善が最早役に立たないのは本当です。「或る重さの物を持ち上げるのが重要である時は、嘘を付くことが出来ません。ここでの優位は大変に明確です。あなたが最も仕事の早い人間であることを新聞で知らせた時は、駆け回らなければならないでしょうし、全てが決められていて、曖昧なことは何もなくなります。ところが、もしもあなたが自分の小説は素晴らしいと鳴り物入りで吹聴させたなら、それは読まれて気に入りたいのです。その意味でスポーツにおいては、その他の多くの戦いよりも沢山の真実があります。しかし、そこから歌を歌うのです。「あゝ、スポーツよ。お前は公平だ」。まさしくスポーツ選手や大部分の審判員には、これらの眼に見えない溝が一つはあります。そして屢々、その中に落ちてその泥水の中を歩く者に勝利が与えられます。

もしもスポーツが思想を調整したなら、その公平さが嘘のない競争と決して対立しない考えを自然と持つようになります。そして弱い者にとっては一層悪くなります。強くなりなさい。それが新しい〈福音〉です、しかし、それは実際には大変に古臭く、陳腐でさえあります。というのもこの野生的な理念は、自らをも支持しないからです。二人の平凡な人間を取り持つスポーツ選手はおりません。もっと適切に言うなら、最後に眠って仕舞ったり、肝心な時に耐えないスポーツ選手はおりません。従って、元気そうで用心深く忠実な子供はそれを守り、強くなるように言い、彼の筋肉を隆々とさせるよりも敵に向かって戦う方が有効になります。そして、その教訓は「強くなりなさい」です。直ぐに他の基本や原則は仕舞い込みます。「友だちを持ちなさい」「味方を作りなさい」を仕舞い込みます。忠実であることは、事の成り行き任せなのです。

しかし、考えるべきことは他にも沢山あります。上手な弓の射手も、あなたよりも少しも強くなり、遠く隔たっていて、あなたに近づけません。そして私たちは弓が要らなくなります。又、優秀な大砲の照準手も力をつけます。しかし爆発物を製造する化学が、殆ど法外に力をつけて、哀れな蛙のように何百人ものスポーツ選手を吹き飛ばします。優秀な電信技師はアンテナを素早く設置して、命令を遅れることなく伝え、ランス(1)のスポーツ選手よりも多分、勝利に貢献することになります。戦闘のプロを忘れないで置きましょう。彼は、数字化された至急便を殆どすらすらと読むことが出来ます。いずれにせよ彼も力です。策略も嘘も力です。もしも私たちの純真なスポーツ選手が彼の〈福音〉に従ったなら、科学というものを覚えるでしょうし、喜劇役者のこつも覚えるでしょう。

武装化すると結局は一種の公平さを身に付け、それに倣って誠実さも知性も手に入れます。しかし、それは正義の影でしかありません。正義は決して戦闘を模範にしません。如何なる種類の戦闘も模範にしません。それは何時も〈神〉の裁きでしかなく、哀れな窮余の策です。そして、それは権利と同じ側面の力を持った判事を前提にしています。正義は決して力に依存しない、と言っても良い位ですが、反対にそのことによって自由意志は力を考慮に入れずに、根本的な平等によって子供と大人、お金持ちと貧乏人を判断します。そこでは〈急進主義〉が相応しい名称になり、気高い希望となります。こうしてスポーツ選手は私の言うことを理解しますが、競馬場

で着想を探す哀れな三文文士は理解しません。

(一九一四年二月十五日)

(1) ランスには体育学校があった。ジョルジュ・エペール海軍大尉が創設した。エペールの体育法は所謂〈自然であること〉であり、何時も上半身裸で素足で訓練した。

九十八 羅針盤 (DE LA BOUSSOLE)

船体や機関が大きい大型船は、磁石の針と経線儀という非常に弱々しい小さな二つの物によって導かれ救われています。従って、何という監視者でしょう。何という毎日の注意深さでしょう。やっとの思いで完成させた修正表によって何という制御でしょう。その上に、ラジオ放送の電波も加えましょう。それは或る場所の時間と共に出来ますし、経線儀をもっと良く制御出来るようになり、もっと正確な経度によって羅針盤にも標示されることになります。どんなことでも説明出来るのは良いことです。しかし、それは何時か或る日です。今日私が行うことは一つの譬えです。

私たちの判断は私たちの唯一の道案内です。しかし、不安定なものでもあります。多くの行動と称賛と非難に敏感です。環境と職業と職務に依存しています。私たちの精神は、私たちの中ではもっと柔軟で、もっと堅固なものがあるということです。私たちが騙されるのはそこからです。というのも、私たちの正直な判断がなければ、誰に誇りも持てば良いのでしょうか。そうは言ってもそれは磁石の針のようなものです。狂って仕舞った空間を変える鉄の一つです。あるいは規定や偏差を認識しなければならない経線儀のようなものです。あるいは何千キロメートル先まで聞こえる無線電信のようなものです。そうです。勿論、電波によって調整しなければなりません。ですから判断のためなのです。何という注意力と監視でしょう。何という一瞬の制御でしょう。

二種類の愚か者がおります。一人は称賛されているのを信じて何ら吟味しない人間です。そしてもう一人は、一度騙されて酷い目に遭った人間です。二人の間には自分の精神を調整しなければならないものがあり、弱さと周期的な逸脱と抵抗を認識しなければなりません、それは動悸のようなものです。というのも、それは少しも議論を外れるものではないからです。読むことで広めていきます。人間は聞くものを全て信じます。そこには精神の最初の働きがあります。だが注意して下さい。精神の正義とは、抵抗や疑念や平静さへの回帰や表による修正を前提にしており、私はゆっくりと行われる判断によって、お互いを比較して細心に聞きます。

最早、如何なる芸術も隠されていません。そして、現代の哲学はそのことを余りに忘れていきます。このカトリック的規律には奥深い経験がありました。それは全ての即座の判断を指導者に委ねていました。私たちはもう指導者を信用していませんし、多くの合理性と理性を持っています。しかし、そのためには最初の考えに自らを委ねなければなりません。バケツに映った月を釣りたい子供のように、無邪気にそれについて行かなければならないのでしょうか。これらの原則について良く考えて見ましょう。「示された観念は全てが間違っている」。「修正のない即座の読み取りは全てが偽りである」。「即興は全てが馬鹿げている」。これが私たちの運命です。静かな奴隷状態や恐怖や酷い盲信から一度解放された私たちの精神が、一直線に真実へ行こうとするのは美しいことです。しかし、私たちは同じ様に有利な状況におりません。非宗教の形成が与えられるその曖昧な観念は、私たちの精神と共にあります。腕時計と共に何時も時間が分かるように、真実が分かるのです。しかし、決してそれが全てではありません。この自己満足から私

たちは身を守りましょう。この羅針盤を修正することを覚えましょう。大型船よ、お前は何処へ行くのだろうか。

(一九一四年二月十八日)

九十九 注意力 (DE L'ATTENTION)

人間の職務には気を付けなさい。しかし多くの人々は、注意しなければならない記号や印を間違えています。宝の山に目覚めて眼を生き生きさせている人間は、知性的に見えると良く言われています。その点では殆ど何時も騙されます。彼は野心家か、人から良く見られたいと注意しているか、あるいは感情に流された儘の動物でしかないのです。それは砂糖を見せている人が頭が良く、多分思いやりのある人だと言っても良いと犬が思うのと同じ様に、間違った考えです。犬が叩かれるのを良く恐れる度に、同じことが言われます。奇妙な観念ですが、そのことを考えるならば、その原因ははっきりしています。人間性を見本は、専制君主、宮廷人、雄弁家、喜劇役者です。羞恥心のないこれらの動物的人間は、真実の人間に間違った観念を与えています。彼の最も美しい時間で観察したり思考したりするその人間は、寧ろ少し眠っていて、ぼんやりとしていて、自分自身のことを疎かにしているように見えます。その結果、彼は傍観者のようにように見えます。

私は、考えたり観察したがる人々のせいで屢々良く笑います。彼らは、へとへとになるまで武器を握ってフェンシングをやる人々のように、やるのが下手です。私は一度、思索する人の頭脳を心理学の対象としましたが、彼らの頭脳から分かることは、犬に欠けているのは言葉だけでした。そして幸運にも私は、頭を貫いて通って行く視線を横目でちらっとですが見ることが出来たと言えます。私はけなし屋を裁きます。それは愚か者たちへの警鐘です。

子供たちはお互いにそのことを理解しています。彼らは誠実にこの喜劇を演じます。あるいはあなたのために演じます。しかし彼らの精神は、中国の銅鑼のように正しい時刻を告げます。それは全てが震えますし、何も守りません。私は、喜劇でない時に読んで書いて描くことに専念する時のように、それを覚えることなく注意していることを愛します。それは明晰な時間を手に入れる時であり、彼は思考することがなくても思考し、取分け思考することがなくても思考したいのです。思考する術は、全ての情熱を平静に落ち着かせることにあります。好奇心も同じです。それは愚かな動物のものでしかありません。

「殆ど放心した視線は戒律を裏切る」。これは凡そバルザックが『クロード・ヴィゴン』で述べていることです。『ジャン・クリストフ』でもこの様に書いているのが分かります。モンテニユ、ラ・フォンテーヌ、モリエール、バルザックも恐らく、この様にして作品を創りました。そして教育における困難は、動物的注意力を眠らせることですが、寧ろ新しい目標に目覚めることです。それ故に賭事に夢中になることは、勉強として何の価値もありません。そして情熱で不動であること、大きな秘密を持って期待し待つことも又、何の価値もないと付け加えなければなりません。書いたり、描写したり、測ったりするように、苛立つことなく慣れ親しんだ仕事でなければなりません。この様にして想像力が整えられるのが分かり、フェンシングをする人のように判断力が生まれます。ですから私は良く次のように言います。「そんなにも理解しようと一生懸命にならないで良い作家を模倣せよ。それがフェンシングの練習であり、判断力のためになるのです。そして、その武器を握り締めてはいけません」。

(一九一四年二月二五日)

〈プロレタリア〉とは、両手の仕事で生活する人です。そこでは両手と振舞いと服装で仕事が明確に示されます。しかし、もし注意して見るならば、精神や品性や悪徳や美德までもが明確に示されています。彼は生産する機械です。人間の価値には曖昧さがなく、議論の余地もありません。私がそのことを書くとするなら、女性靴製造の仕事では一流の専門家のことを考えます。気まぐれに働く放浪者や酔っ払い、少しも仕事を見付けませんでしたし、それを望んでも大した収入ではありませんでした。作られた物が大切なのです。この例によって、古代の賢者のような何らかの能力と、至る処にそれを持ち運べるプロレタリアの自由を人は見ます。

商人の精神が身に付くと、奴隷の精神が姿を現します。私は、木彫に優れた技術を持った職人と知り合いになりました。彼は自由で、侮辱的で、冷笑的でした。自由な彫刻で創造する芸術家と彼とを比較して下さい。芸術家は気に入られたいと望みます。あるいは気に入られないと腹を立てます。その判断規準は批評家によるのであり、新聞によるのです。そこは世評の徒刑場であり、世評に鞭打たれます。もし立派に振る舞ったなら、徒刑場の監視人や奴隷や暴君にもなります。それは〈学院〉であり、貧しい作業の哀れな報酬です。大建築物は建築家や石工が必要ですが、自由な精神を大切にするのは一般には煉瓦職人です。他の者は自分の精神を売り飛ばしました。

礼儀正しさや話や諂いで生活する人間は、〈ブルジョア〉と呼ばれ、それは細部にまで完璧に定まっています。商店のショー・ウィンドーは、気に入って貰おうとしている談話のようなものです。ネオンサインは、オラトリオ風の小さな礼拝堂に属し、広告でもあります。

以下は、あらゆるものに敏感である性格のうちの一つです。物を売る技術はブルジョアです。創ったり試行したりする技術はプロレタリアです。あなたは、ネクタイやズボン吊りで両方とも見抜きます。一方は世評を大切にしますが、他方は世評を馬鹿にします。自分の職業で先生になった者は誰でも、その仕事は何であっても異議を唱えませんし、プロレタリアへ戻ります。そして数学の職人であるアンリ・ポワンカレが言うことを理解した者たちは、私が言いたいことも分かると思います。様々な世評は顔付きを読み、表情を変えます。ユダヤ教の教師とか教授とかアカデミー会員とか年金受給者になることが出来たスピノザは、手仕事を行う者として生活しました。彼は先生でしたし、ガラスのレンズも完成させました。従って彼は、考えたことしか言いませんでした。権力のある金融業者、大企業の経営者、偉大な雄弁家、真の詩人、一流の俳優でさえも屢々プロレタリアの簡潔さへ戻ります。それはブルジョアにとって、見る者を石化した魔女メドゥーサの頭です。それを良く観察して下さい。人が本当に価値あるものにお金を払うとなると、冗談でなく労働者の姿を見せます。サロンにはその様な人を大変に必要としていますが、大変に怖くもあるのです。

(一九一四年二月二六日)

(次章へ続く)

人間の判断の不安定性は知られていませんが、それを知ることは大変に重要です。そして、それ以上にびっくりすることは、最も正確な器具や道具は最も容易に調子が狂う物でもあります。例えば、それらの器具はあなたに同じ一本の電線で十通も電報を送って来ますが、それらを運用するには事物の職人がいなければなりません。従って科学においては、自分自身を過信する者は誰もいないことが分かります。誰もが自分の判断を調整する方法を考え出して使用しますが、それは絶えず尋ね、急ぎ、疑問を持つ時であるのが分かります。しかし彼の専門外であってもこの天文学を引き出して下さい。彼は女中を非難し、妻や息子たちを判断して、新聞によって調べもせずに態度を決めます。彼が抱いた最初の観念がぞっとするような自己満足と共に決めます。恰も或る観念を判断しなければならない時に、何時も間違い易い彼の精神が、或る人間を判断するのが重要な時には、突然に間違っていなかったようなものです。

それは二つの原因によります。何故なら彼は自分自身を非常に信用しているからです。情熱の光が彼の暗い光を照らしているからです。それは既に、自信を持っていることによって大きな弱点になり、人を判断するや否や、謂わば議論を与えるのも大きな弱点です。「私は大変良く彼を知っている」。音声や顔付きや態度による第一印象で受けるものが、屢々最良の判断であることはあります。それは恐らく、新しいことも疑い深く待ち伏せされているようなものと同じです。しかし、毎日見ている誰かが気になったならば、見慣れた顔にも不可解なものが何かあります。それは慎重さのない大衆の判断でしかなく、彼とあなたの間で起こるものです。それらはあなたの間違いであることが良くあり、あなたは本を読みます。私たちは余りに多くの記憶を何時も持っています。同時に、余りに多くの印象が繰り返し現れます。その意味においては最初の印象が一番正しくなります。しかし、最初の印象というものは屢々偏見の固まりです。それ故に、それらは非常に都合の悪いものであるのが分かります。もし出来ることなら、それについては全てを判断しないことが一番良いことになります。狂人たちは、自分自身の確信を持った判断に酔っています。

情熱には驚くべき純真さがあります。誰にも敵がありますが、彼らのことを想定するもの全てが間違っています。例外なくそうです。敵が一連に企てているものは、あなたが想像していることです。共鳴器に耳をくっつけた者には一つの音しか聞こえないように、あなたが敵の話をしている時には予期していることと一致したことしか認めません。兆候が弱くても、劇的事件を創り出すのが非常に巧妙な迫害に関する偏執狂は、情熱ある人間を大きくした印象しかありません。そして人間は知性的になればなる程、自分自身を騙すのが上手になります。多分、モリエールが妻を騙したように上手になります。そこから分かることは、例えば優れた物理学者が、もしも感動させられたなら、子供のように交霊術のことを判断します。信じるべき肩書きは何もありませんし、雄弁であっても尚更信じるべきものは何もありません。

(一九一四年二月二七日)

もし〈正義〉に到達したいなら、全ての神々を克服しなければなりません。例え固定された順番や特権を決して利用しないとしても、それらを認めて甘受している人を良く考えてみて下さい。その人は信じたいし、崇めたいし、祈りたいのです。そこに到達しないで残念に思っています。素直に信じて、崇めて、祈る人々を全て彼は尊敬しています。主任司祭は告白に近いような対談をした後で、彼に言いました、「あなたは知識もなく信じています。あなたは眠っている間に、神の恩寵に触れました。それはあなたの中にあり、あなた自身の基本となり、表面的でしかない疑う理性よりも強くなっています」。しかし、懐疑論が信仰に連れ戻すのは本当です。それは自然な状態でもあります。

信じることは難しくありません。それは子供の気持ちです。怠惰と同じです。そして何時もそこから始まります。記憶と習慣も信仰と同じです。賢い犬のように子供は、それらを加えたり増したりしますが、知ることよりもそれ以上に信じることを愛します。しかし理工科学校生になることは出来ます。幸せな従順な精神を思い出して、何時も固定された順番や権力を尊重するようになります。至る所で聞かれるこの種の話には、悪い快樂があります。「私たちは何を知っているのだろうか。私たちの仮説は、話をするための便利な方法でしかない。電気とは何か。私たちは何も知らない。時報の受信器とエッフェル塔のアンテナの間に何が送られているのだろうか。私たちは知らないでいる。信号が到達しているのである。そんな風にして幾つもの証拠の中に一つの証拠があって、その底に唯一の証拠がある。それが真実であり、正しい結果を生んでいるのである」。これは正確には、次のように言う小学生の精神状態です、「私の足し算は正しい。これ以上にあなたは何を要求するのですか。そして経験によって十分に証明されている方法を、微妙な証拠で正当化したいのは何故でしょうか。優れた会計係は早く正しく計算する人であり、足し算の理論に凝る人ではありません」。この小学生を人は笑います。真実から遠くないことを良く知っています。しかし、何故自らの精神を捨てもしない人を笑わないのでしょうか。知る事のあらゆる段階において、内面的事件は同じものです。というのも全ては決して明らかにならず、単純な足し算と同じであるからです。信じることから自らの精神を、あるいは信じることから信じられない残り物を、何時も選択しなければなりません。私たちの幼年時代の神々は、何時も私たちの隙を窺っています。

思考することは、それを乗り越えることです。偽善の名の元に軽蔑し無視しようとすることは人間の最も良いものです。抽象作用であり、単純化する人間としての自由な意志であり、あらゆる危険を冒しても彼は経験や混乱や幻や神々を排除して、人間の勇気という奇跡である彼は、自分の思想において明確にしたいもののためにしか注意したくないのです。私は何時も、天体を観測する時に貯水槽に降りていた老人タレス(1)に感嘆していました。真実の人間として完全に象徴となる人は、自分自身のことよりも思想のことを多く考え、水に濡れた彼のことよりも思考する彼のことを多く考えます。「貯水槽に気を付けろ」。それは司祭や予言者や保守主義者の叫びです。しかし神を信じない人は、神々や予言者や信仰による救済もなく、一番明確になった彼の

思想を模範にしたいのです。その点で彼は、謂わばタレスの時代にはトラキアの侍者たちや哲学者たちを笑わせていました。

(一九一四年三月六日)

(1) タレス (前六二五年頃～前五四七年頃) は、古代ギリシアの数学者で自然科学者で、七賢人の一人である。

百三 悪魔 (SATAN)

〈悪魔〉は自尊心と誇りによって消え失せる、と〈教会〉は教えています。この考えを推し進めて行くと、もしもその悪魔が永遠に地獄に止まっているなら、それは〈天国〉へ入りたくないからであると言うようになります。悪魔は自ら進んで崇めて幸福になることを禁じておりますが、そこには冒瀆があります。

私は、神を信じない自由な人間と知り合いになりましたが、彼は非宗教の学校や民衆教育のために尽力していました。演説、祝宴、教育功労章の勲章という沢山の予定が用意されて大臣がやって来ました。その時は、晴れやかな褒美が与えられる時でした。しかし、元気で活動的な男はその日、魚釣りに行っていたのだと思います。探しても無駄でした。彼は大臣主催の祝宴を忘れていたのです。その罪は再考の余地がありません。その行いは殆ど悪意すら感じます。忘れて無視するのは、大変なる軽蔑です。もしも悔悟の情が明確に表されたなら、過ちは全て赦されたことでしょう。しかし事態は最悪で、彼は不敬虔にも幸せそうでした。それは誇りを考えるのと同じではありません。あなたは永遠にそれを剥奪するでしょう。この非難には深刻な問題が含まれています。

私はもう一人の老人を思い出します。私が非常に若かった頃でした。彼は文芸と良俗を教えながら、誠実に国家に奉仕していました。勲章を授かり、彼のための祝宴を忘れることは許されません。そこに出席した彼の上司たちは、彼を称賛する演説を行い、その老人の名前が言われる度に立ち上がって、お辞儀をして感謝しなければなりません。彼は毎朝、ミサを聞いていました。彼は私を大変に愛していました。私が何もかも信じていなかったのを見て、彼は脅えていました。「けれども、あなたは悪人ではない」と彼は言いました。何処にでもいる狐のような役人たちの平凡な讃辞に立ち上がって頭を下げるしかありませんでした。私は自問しました、「若い人は良く聞いて下さい。あなたは決してそんな風に立ち上がらないでしょう。そんな風に決して頭を下げないでしょう。今は大きな誓いをしなければならぬ」。以上は、あらゆる種類の勲章や、古風で型に嵌まった讃辞を自分に禁じる理由です。そして、そこには無宗教があります。

スタンダーは、ロンドン塔に十年前から幽閉されているイギリスの哲学者に言わせています、「神という観念は、暴君には最も有益である」。地上の権力に敬意を表することは神には最も有益な観念である、と言う方が私は好きです。それが神を存在させているのです。手や足をつこうと跪こうと、大きな違いはないと私は思っています。それは何時も精神の弱さ、前兆や表情への注意力あるいは重荷となっています。社会学者たちは未開人を観察してから、人間が気に入らないのを恐れるしかない〈社会〉の制度を語ります。彼らは最早長く思考せず、全てが宮廷人的です。二十年前に死んだ王の名前に何度もぺこぺこ頭を下げます。スイス独立の英雄ウィリアム・テルのように、彼らは棒の上の帽子に頭を下げているのです。そして感激すらして、彼ら自身に謝辞を言っているのです。私たちプロレタリアの文明はその様な徳を全く軽蔑しているのを、私は明白に理解しています。

(一九一四年三月七日)

百四 ピンの友 (L'AMI DES ÉPINGLES)

浪費癖は少しも良くありません。ここでは小説家や軽喜劇作家やその他の娯楽作家たちのような余計者の考えは、乗り越えなければなりません。儀仗隊を編成するために四十キロメートル四方の全農民を召集する暴君を考えて見て下さい。それはまるでパンに近寄っているかのようなのでしょう。最大の不正は、自分が取得する物と交換に必要な物そのものを生産しないことです。でも最悪の不正は多分、権力を示すために自分が行える労働であつてもやらないことです。それは何もやらない者に、何時も得をさせる奇跡のようなものです。お金を浪費することと、お金を遣うことは同じではありません。というのも労働に対して労働の交換しかないことが、お金を遣うことであるからです。それは現実には両者が豊かになります。お金を浪費することは、労働をする者たちを邪魔するために遣うことです。それは見ているだけで、お金を支払う財産を市場に出すことです。生産せずに消費することを許すことです。例えば浪費家が頑強な男にお金を出すのは、何時も彼を待たせて置いて外套やステッキを取らせるためであることです。時間が無駄です。もしも私がこの男の礼儀正しさや巧みな振舞いにお金を払うのを止めて反対に、小麦を購入したとするなら、その消費は私を貧しくしないで、小麦が手に入ります。消費するばかりで何も生産しない人間に、小麦は犁を持って来させて耕作させますので、皆を豊かにします。

何も生産しない寄食者たちの罵り声には、吝嗇でなければなりません。彼らは自然にまともな道徳を身に付けるようになります。彼らが贅沢を称賛し巨額の浪費を耳にした時、私は次のように言う卑屈な言いなりの士官たちを聞いているような気になります。「名誉ある立派な人間は、如何にして卑屈な士官たちを無視するのだろうか」。そして何時も虚栄心によって彼らは、吝嗇を止めさせようと思います。「昨日、あなたの華麗さは皆が褒めていました」と、バルザックの『人間喜劇』に出てくる色っぽい女優は言いました。しかし、モリエールの喜劇『守銭奴』に出てくる主人公アルパゴンは冷ややかな顔をしています。余りに卑しいと教えられた笑いを、私は抑えたいのです。というのも世評に反対するこの力を、私は美德の一部であると認めているからです。

一本のピンを拾い上げるために身を屈める人間は、自分自身のことを思考する人間以上の何かがあるのは確かです。私が儉約家と理解し、吝嗇と信じた大部分の人々は、今日のだらしなさや浪費癖に憤慨していました。発見した一本のピンは、少なくとも有益な物ではなく、何の価値もありません。人間の労働で生産された物ですが、足元の泥で酸化され、すり減って無駄な物になります。このことを良く考えて下さい。ピンを拾い上げて、服の襟にきちんと刺す者は、人間の労働を少しは助けて役立っているのです。そのことは何の報酬もなく、一本のピンを生産しているようなものです。何も生まない人が利用する物も、全てが労働する人々の贈り物のようなものです。しかし、最初の贈り物は決して手に入りません。そしてピンを投げ捨てたことは、それをこっそり盗むようなものです。従って良く考えて、そして私の周りにいる者たちのうち典型的な臆病者を見捨て、私はピンの友を愛することを習いました。私はこの冷静な慈善家を愛します。私は、そうでない他の全ての人々を恐れます。

(一九一四年三月十一日)

私たちは信じるために構築します。どんな歴史もそれを十分検証します。それが私たちには面白く、繰り返して言うや否や物語は真実の様相を呈して来ます。偽りの様相であっても疑う人は一人もいないのです。彼らは、物事が既に予想されている時には証拠を待つべきです。従って良く見るためには、証拠のない物語や少なくとも最もらしい物語に反対し、可能な限り否定するどんな力も寄せ集めなければなりません。しかし、軽率な聞き手がそこにいたなら、証拠に対して戦う力は全て取って置きます。敵が既にその場にいる時、門はきっちりと閉められています。

人は望むものを信じます。そして、そこから右翼の中傷家たちが私たちの指導者を攻撃する時は、或る意味では誠実です。しかし、もしも用心しなかったなら、耳に聞こえることを信じます。中傷には、火のない処に煙は立たないもので、何かがあると良く言われています。私としてはどんな中傷でも反対政党を決して選ばない精神で、全てを止めているように注意しました。それは公平で偏見のないものを残して置くことを強く主張するものです。それは告発という悲劇を生むものです。突然に人は告発するようになりますし、生涯告発し続けます。そこから私は、世論の力に納得します。カエサルの妻が嫌疑をかけられるべきでないのはその通りですが、それは皆の真実です。誰もが、見失うべき無垢のドレスを何時も持っています。一番の中傷家の思うが儘に無くして仕舞います。それ故に、断言しないことは十分ではありません。受け入れる必要はありませんし、耳を塞がなければなりません。あるいは、もしも余り早くそれが出来なかったなら、証拠がないものは否定することです。否定することは、それに相応しい態度と一緒にであれば、全く高度のものになります。というのも私は人々の結果を壊すことが出来るこのメカニズムしか理解しないからです。

中傷家の夢を信じる人がいるのでしょうか。何しろそういう人はいるのですから。誰もそんなものは信じたくありません。しかしそのことを考えること、つまり基本的には疑おうと努めて、全てを肯定することは間違っています。それは情熱の罠であり、非常に危険です。間違った証拠で議論している間に、それは受け入れられ、嵌め込まれて、信じられて仕舞います。何であろうと、誰であろうと、私に言って下さい。もし私がそのことを良く知らなかったなら、物事は決められて、私は全く無邪気にそれを信じることになります。そして、もしもそのことが私に不快感を与えたとしても、それを信じないと少しも考える必要はありません。一時の感情は、蜜蝋に引かれた線を頼って流れる酸のようなもので、金属を侵食します。

私はこの時に対独協調派のカイヨー大臣のことに注目します。又そのことは昔、第二帝政に反対したペルタン大臣のことに注目しました。それらのことを殆ど認識していない人々にとって、まるで敵は望むところでした。これらの連想した判断に反対して、私は私自身を守るためにしか同じ位の力を決して使いませんでした。私が理解したところでは、私たちの最も忠実で誠実な友人たちは屢々余りに無邪気であり、枝葉末節の意地悪を繰り返しては自己満足しています。というのも敵はもうこれ以上要求しないからで、このことを良く分かって下さい。敵はメカニズムを当てにしています。何に対しても私たちには意志以外の方策はないのです。

(一九一四年三月十七日)

非難するのを喜ぶことは自分に禁じるべきです。何故なら非難は役に立たないで害があるからです。攻撃には抵抗して下さい。不正を無力にして下さい。疑わしい人間からはあなたの信用を引っ込めて下さい。弱者を守って下さい。非難には良いものは何ともありません。情熱のない戦いは直ぐに平和になりますが、非難は戦いを生み、それを正当化します。判事が時々、二人の憲兵の間にいる者へ言葉をかけるこれらの非難を、私は容易に我慢出来ませんでした。それは彼を追放することです。その判事の処からもっと遠くへ投げ返すことです。それは国民を裏切り始める大臣を萎れさせたがっていながら、裏切りを加速させて、落下した場所から押されるのと同じメカニズムによるものです。もしも可能であったなら、権力を支持しないのが最大の英知でした。何事も憤慨を説明することよりも、意志を感受させることの方に高い価値があります。そして通常は、非難をすることによって他の者たちに得をさせることになります。というのも誰もが、自分で行って理解する考えから何時も行動するからです。真の寛大や友情による美しい結果は判断の中であって、事実の中ではありません。その時は好意的な考えに沿って整理されたものからやって来ます。まるでそれは正当化しているかのように見えます。それは何らかの名誉と関係したものが礼儀正しさを求めます。しかし真の寛大は、何ら軽蔑することなく行動において強く、礼儀正しさよりも遠く行き、多くの果実を与えてくれます。

私は明白な方針から出発してこの考えに辿り着きましたが、人は絶えず忘れます。「子供には非難する程のものは何もないが、少なくとも立ち直らせることである」。子供の怒りは、熱とか腹痛のようなものです。原因を見付けて治さなければなりません。非難してはなりません。というのも非難の結果は怒りになるからです。そして子供の幸福にとっては、罵ることよりも酷い間違いはありません。何故なら、子供は敵愾心を燃やして、少なくとも子供にとってはあらゆる罪を正当化するからです。あなたは言います、「嘘をつく子は、もう決して信じない」。この有害な言葉によって、殆ど嘘をつく許可を与えているのです。というのも嘘の中での大きな悪、恥ずかしい悪は、疑うことも不信もなく素直にあなたを信じている者に嘘をつくことであるからです。

しかし、もっと良く見て下さい。子供は嘘をつきません。「私は嘘をつかない」と子供は臆面もなく言いますし、あなたも信じて下さい。でも、そうでないのは明らかです。するとあなたは愚かにも腹を立てます。私は素直に言いますが、嘘について子供が平手で打たれるのを避けるのも自然です。子供は言葉で身を守ります。選択はありません。緊急の用件に先ず取りかかります。あなたが言うように臆面もなく嘘が大きくなればなる程、決して嘘でなくなるのは明らかです。しかし、それは寧ろ不器用であり過失です。嘘が援助するのは不可能であると理解しているから、真実を言う決心をしている悪賢い人間に誠実さなど僅かしかないのは良くあることです。もしもあなたがそしてのような間違いを考えるなら、私の教訓をもう一度言って上げます。非難することは決して立ち直らせない。それは二度も身をかがみ込ませて服従させることになるのです。

(一九一四年三月十八日)

何時かそのうちに、とうとう理解するようになる事物が二つあります。それらは牛をつなぐ軛（くびき）と銜（くつばみ）です。耕作用の牛たちよりも崇高な様相を呈していて、牛飼よりも優しい人間のようです。そうです、アカデミー風な様子をしています。しかし、ものを量る人の眼は、二頭の丈夫そうな牛の頭を下げているこの木片の重さを量ります。その時の連結は疑われ、耕作や肉屋のための去勢も疑われ、暴力しかなく、如何なる義務もなく、そして如何なる友情もないと言いたいのです。何故なら偽善は美しくないからです。

多分、牛を愛する牛飼いたちはおります。しかしもっと悲しいことは、牛飼いたちを愛する牛がいることです。馬に乗る騎兵が、馬を愛するのは当たり前のことです。もしも愛情もなく鞭や拍車を使って馬を急がせると同時に、下顎の痛い急所を苦しめるなら、それは野心だけしかない何かの印によって伝えるためです。というのも十分に育った名馬は気高い動物であり、その行いを人は愛するからです。絵画はそれらの事物の様式を創造しましたし、ギャロップで走る馬は殆ど野心に溢れた姿をしていました。しかし写真を撮ってみてください。それは決して嘘をついていません。競争に勝つ馬は恐怖に狂ったような様子をしていて、更に苦痛を見せているように見えます。それは力強く、敏感で、殆ど盲目のような動物でしかなく、人は腕で力一杯叩きます。三銃士のダルタニャンは、二頭か三頭の馬を大変上手に乗り回しました。彼にとっては消耗品でしかありませんでした。あなたは馬が暴れないようにする鼻ねじり器を使用することを考えましたか。それは遠慮のないものです。恐るべき友情です。その人間は雄鹿と一緒に戦争をしますが、馬と一緒に平和である、と言う者たちは平和と戦争の観念を形づくっているのです。しかし多くの奇妙な判断が、それらの事物についての理解が行われます。私は馬で判断したいのです。そして戦争と同じ位に平和のことも心配しています。

しかし、犬の前では判断が停止します。精神が深遠さの上で宙づりになった儘です。そこにいるのは鎖が好きな奴隷です。主人へ献身し、その言葉は余り大きくなく、そして何時までもそのようなのです。大食と恐れは、そこまで行く可能性があります。餌を与えたり叩いたりする人間の手を、進んで舐めて何をしているのでしょうか。その次に私はそこに知性を見ますが、理解することは僅かです。この犬は放浪者に吠えます。もしその犬が放浪者の犬であったなら、密猟監視人を噛みます。犬の記憶は非常に忠実で、胎内の記憶であり、空腹よりも強いものです。盲人の心の眼であり、感謝の気持ちでもあります。人間を赤面させる光景でもあります。それは詩人が言いたいように、似ていないからではなく、似ているから赤面させるのです。私は、「ル・フィガロ」紙を創ったヴィルムサン氏の時代について最高のエッセイを書いた或るジャーナリストの覚書を読みました。ヴィルムサンは、作家たちを論じたように理解しなければなりませんし、作家たちは彼を崇拜していました。心の底から崇拜していたと私は信じます。信じざるを得ません。それは恐れや感謝や野心からでしょうか。そうです、私には偽善者が分かります。しかし多分、嘘つきが嘘をつき続けるには余りに荷が重すぎます。もしも抵抗しないなら、愛さなければなりません。そして、もしも大声を出して否定する勇気がなかったなら、そっと密かに信じること

です。というのも自然は雌犬であるからです。もしも服従するなら愛します。以上は、無宗教は軽蔑されるに違いないということを決して言うてはならない理由であり、無宗教は素直である理由です。しかし犬の不思議は、牛のような轡も銜もないが、それ以上に最も包み隠されているのです。

(一九一四年四月八日)

百八 奇跡を否定すること (NIER UN MIRACLE)

奇跡を否定することは、宗教に反対する立場にいても、宗教を認めることになる人です。「私はその人の奇跡を否定する。何故なら私の奇跡だと認めるからだ」。この世に生まれた創意工夫に富んだ人間は、もっと注意深く考えます。彼は何も否定しません。全く反対です。彼の目的は、より良いものを肯定することです。私は、経験という織物の中で奇跡をより良く掴み奇跡を確かめるために、人間たちから分離してついて行き、ついには奇跡を削除します。そこに本当の道があります。

手品師は小球を見せます。タンブラーをそれに被せます。私が自分でタンブラーを持ち上げると、小球は消えていました。手品師は言います、「良く見ましたね。小球は消えました」。勿論、私はまさしく良く見なかったのです。私は見たことを疑問に思いませんが、この小さな奇跡を全く冷静に肯定するには、未だある認識が私にはありません。又、手品師が大変に巧みなら、私の知らないようなことを見付からないようにやるでしょうし、私には何のことか全く分かりません。ですから私が観察し、彼の口の中とか、掌とか、あるいはタンブラーの底にその小球を見付け出す時が来るのでしょうか、その時は何らかの方法で小球を止めて置いてあるのです。その後で、もしも単純な人が小球は本当に消えたと思っていると言ったなら、私はその人を嘲笑して、小球を見付け出します。否定することからはもっと遠くへ離れて、私はその人よりももっと自分を主張し肯定します。私は彼が無知であると思います。何故なら無知であるのかさえも私には分かるからです。

見えるもの全てが結局真実でなければなりません。言うことは大変に弱いです。「それは決して真実ではない」。反対に、それが真実であると理解するためには探究しなければなりません。水中の棒は決して折れていませんが、水中の光線の進行によってその様に見えます。私はそのことを知らない限り、空しくも折れていないことを否定します。というのも私の本能は何時も棒が折れていると肯定するからです。同様に私は、それは何もなくて夢であると言いたいのです。しかし無駄です。見えるものは何時も何ものかです。私はそのことを知らなければなりません。見るとか聞くとかするのだから、私は究明しようとしみます。何故なら血とか気分が、耳に時計の音とか眼に光る物を生じさせるようになることは良くあり得ることであり、実際に屢々起こるからです。霧とか黄昏時とか、単純に注意力がないことによって事物を間違っただけ見ることも起こります。時には私自身がとった行動が、その影響を事物に与えるとか、反対に列車の中にいる旅行者が、別の列車が出発したのに、自分の列車が出発したように思うこともあります。そこから頭を動かした立像についての信仰が沢山生まれます。「馬鹿な。あなたの一つひとつの動きが世界を踊らせている。この世の人間たちは確認することを覚えます。もしも全てが即座に真実であったなら、あなたの近くにいる人は地平線にある森よりも大きいと言って下さい。しかし、あなたはそうでないことを良く知っています。ですから見えるものを肯定するには学んで下さい」。その人は太陽からの距離を正しく思考するようになり、見えるものを解明する方法を正しく思考するようになります。しかし太陽のように姿を見せているものは何でも構いませんが、まだこれか

ら本当の大きさや動きや距離を探求しなければなりません。太陽は先ず夢でしかありません。従って雄弁家が信じる限りは全てが奇跡になり、職人が軽視される限りも全てが奇跡になります。人は欲望や恐怖から判断し考える限り、紐も直角定規も鉋も必要なくなります。

(一九一四年四月十三日)

一つも信じない哲学者を私は昨日思い出しました。私としても殆ど信じません。しかし時折、私には今でも教えてくれますし、実用という原則を私たちは繰り返し言っています。「人が言うことは全て間違っている」。実際に人々は、思っている以上に大変に単純で、信じられない位に純真です。そしてマキャベリ主義を感じることは、全てを歴史家へ任せなければなりません。そこには多分、判断機能を訓練する人々も加えましょう。意図について判断する方法は多くが危険を伴い、結局のところ全て情熱に任せて仕舞うと言わねばなりません。しかし私は、決して職業で人を判断しませんし、好みで歴史家も判断しません。私は忘れることが好きです。忘却は健康的です。

多くはそうならなければなりません。新聞の朝刊が前日のことを包含するのに気を付けて下さい。私は時々、夕刊も購入しますし、翌日の新聞は繰り返し言の結果のように思います。貪欲な好奇心を発揮させましょう。思考が円を描いて回り、何時も同じ所に戻る野蛮人を疑ってかかりましょう。それをもう一度言うなら、迷信という言葉の本当の意味は、信仰が強くなることよりも認識がだんだんと真実でなくなって来ることです。その様にして宗教が生まれます。イエス・キリストは何を残しているのでしょうか。信仰はだんだんとなくなり、世紀から世紀へ議論や公会議や破門によって決められて行きます。しかしそれは最早、中身のない形でしかありませんでした。生き生きとした精神は留めていますが、それは判断するためであり、知るためではありません。前へ押し進める思い出があります。それは正しいのですが、思い出は後へ引っ張るものでもあり、それは既に病気です。狂人は繰り返しそれを行い、憂鬱症の人も同じです。

もしもお望みなら、修行期間中にも歴史はあります。しかし間違った記憶を守る徒弟は何を考えているのでしょうか。その間違いを繰り返し言うのでしょうか。勿論、違います。徒弟は覚えます。そのことが言いたいのは、間違った動きは忘れ、最早身に付いていたぎこちない振舞いを思い出さないことが出来ることです。それ故に彼は習ったことを忘れたのです。そしてまさしく彼は過去を利用したのであり、同時に削除したのです。国家が経験によっても強くなるのは本当ですが、忘れるという条件付きです。それは恐らく小麦や水車小屋や鋸や梃子のように、最も美しい発明品には歴史がいらないという隠された法則によるものです。その代わりに、最も愚かな発明品である奇跡のお話、迷信、カリブ人の信仰は、何時も歴史に依存しています。そこには何でもありますが、重要なものも除かれています。私が理解するのは上手に行動するか、判断するための法則です。旅行者は美術館から美術館へ走って見学してその印象を語ります。画家は塔を描いて全てを忘れます。しかし描くことを覚えました。従って国民は、議論の余地のない明白なデータによって、各々の事柄を正面から堂々と判断するのを覚えなければなりません。労働者が自分の腕を信用するように、本当の記憶を信用することが出来ます。私は、自分の哲学を他の原則で提示したいのです。「覚えることは忘れることである」と。

(一九一四年四月十四日)

「どんな犯罪も感情的である」。それは或る人が昨日、私に言ったことです。私たちが何について議論したのか、人は良く見抜いています。しかし、私が少しも望んでいない職務なら陪審員に任せて置いて、一つの言葉の意味を決定するのは役に立つと思っています。それは大した苦勞をすることもなく、私たちが決定したことです。

どんな犯罪も感情的であるということが良く言われますが、その意味において人を殺した泥棒は、お金とか快樂への感情からつい流されて仕舞ったことでした。しかしその場合において気を付けなければならないことは、殺人者と犠牲者との関係には感情も愛も憎悪も軽蔑も侮辱も恨みも決してないということです。そしてお金への感情は、人を殺す泥棒に決して直接結びつきません。相続する目的で或る人が毒殺した時のような他の場合には、お金への感情が直接的に人を殺すようにさせたのです。決して憎悪や侮辱や激昂が、毒殺した人とされた人との間にあったものではありません。その様な罪が感情的であるとは、最早決して言われるようなことはありません。

その様な時は反対に、何よりも殺人者と犠牲者がお互いに顔見知りで、一方が他方を害するようになる状況が生じていると言えます。両者のうちの一方が、他方を害する意志を持っているのが明らかな時は尚更そう言えます。更にもっと正確に言うなら、この意図は行動に移りました。実際に侮辱とか、少なくとも買い被りがある度に、殺人が復讐として行われる度に、犯罪は感情的になります。その動きの中に愛がある時には著しくなります。何故なら、それらの侮辱は陪審員が殆ど理解出来ない多くの意味を持ったものや、冷静な感情や約束事から行われているからです。嫉妬からの殺人は、感情的な犯罪の中でも極端なものです。しかし、もしも恋人たちの一人が他人に対しての復讐を見ながら中傷家を復讐したならば、その罪は既に性格的なものにあります。その場合、陪審員たちは十分な損害賠償を与えられません。冷静な感情である情操は、永遠に失われています。その人生は台無しのように見えますし、治す薬もありません。

殺人が侮辱への反撃である度に、感情的な犯罪になります。そのために裁判は決して十分な防止になっていないと多分言われています。もしも良く見てみるなら、この種のどんな感情的犯罪においても、陪審員たちの寛容は先ず話にならないように思えます。姦通や名誉毀損や中傷のように、法によるものでないとしても品行として非難すべき行いであると思われます。あるいは両方に不正があるような一連の長い攻撃や反撃もあります。しかしその他に、性格も追加しなければなりません。情熱による高ぶりの絶頂は、不条理な行動によって眼に見えなければなりません。そのことは熟慮を少しも排除しません。情熱という異常な判断においても、不条理な行為を良く考えることが出来ますし、人が追い求めなければならない目的と反対へ行くことも私は耳にします。狂人たちは時々これらの策略を持っています。

感情的な犯罪を許すことが出来るなら、知らなければならないことが未だ残っています。私は、何故陪審員たちが許そうとするのか、明らかに良く分かります。しかし復讐することを考えている人間が、彼に味方する意見を信じる事が出来るのも危険です。私は懲罰という恐怖を無視

しますし、それは恐らく、怒りの中では余り大したものではありません。しかし考えに従って正しい行動を取ろうとする確信や、少なくとも許しというものは情熱を大きくします。というのも情熱というものは、大いに考えによるものであるからです。議論をするには先ず共通に使用するものに倣って、言葉を決定しなければならないのが常です。

(一九一四年四月十五日)

(次章へ続く)

畑にいたその哲学者は、杖で大地を叩きながら私に言いました。「死者と呼ばれることは、少しも興味のない小さな歴史の決定的な忘却でしかなく、それは人が歳を取るにつれて辛辣になることでさえある。私の死後も全てが続いているのだ。生命も意識も思考も全てが続いている。死後の世界は直接的である」。

私は生まれた儘の観念を愛します。死後のものは未だ十分にきれいになっていませんでした。それでも生き生きとしていて強いものです。私は彼に答えました、「もしもその思想を未開人が生み出し、素直に信じてその思想を大きくさせないなら、子供のような神話を誕生させることになります。そしてカトリック教は多分、何よりも最も子供のようなもので、個人と共に始めて決して終わらず、実際にはついに生まれ変わることが決してない時間に沿って歳を取ったのです」。

哲学者は言いました、「そうである。生まれ変わるとは、若く生まれ変わることである。あるいは何か良いものに生まれ変わるのであろうか」。

私は哲学者に言いました、「若くです。そうです、若くです。つまり既に思い出はなく、少なくとも共通した経験という宝物と一緒にです」。

彼は言いました、「しかし古代人の輪廻とか、若返った魂の旅や記憶が無いことは、大変に礼儀正しく、年老いて、宮廷人的で、そして王座の足元にある足載せによって報いられた魂と一緒に、現代の神学の緻密さよりももっと正しい物事の叙述が行われていた。全く正しいことは生き返ることだ。そして、もう一度苦勞して更に楽しむことであり、更にもう一度創り出すことであり、更にもう一度死ぬことである。一度しか生きない賢明な老人たちのように、再び始める代わりに終わることに希望が少しもないことを語っている老人たちのように、何時までも座っていることである」。

私は彼に言いました、「そうです。しかし積極的になりましょう。私たちは、この世で考えること以上は余り考えません。（そこで彼はもう一度大地を叩きました。）そうです。何故なら私たちは決して高い処から降下しなかったからです。地球に生まれ、そして植物が地球の力で生えるように、私たちは地球の力と共に思考しているからです。結局のところ、この惑星には木々や花々があるように思考があります。そして思考は、西洋すももの木の生命が全ての枝や芽に共通しているように、思考する者たち全てに共通しています。一人ひとりの魂と共に、スコラ学的な小さな器量によって腐った精神にとっては大変な驚きです。その様にして私たちは共同の科学や機械や正義を生んでいるのです」。

彼は言いました、「しかし、私たちは女性から生まれたことを余り考えないし、先ずは女性の芽であり、女性と共に感じているし、次に私たち自身として考えて感じているが、共通の体験や言語によって女性やその他の人々と何時も一致している。その辺のことを思考する精神は、自分自身の中で最も貴重な善である。そして私は英雄の言葉を信じたいし、英雄はこの共通した思想が救済されるために満足と若さを死なせている。その次に、自由を死なせているのである。いず

れにせよ、死は新しい展開でしかない」。

しかし私は言いました、「そうです。神学者たちを否定することに対して自説を曲げてはいけません。交霊術に対しても同じです。彼らは一人ひとりの精神が何時も決して何も忘れないという望みに再び落ちて行き、そして永遠に歳を取って行く時、私は毎日のように忘れて行きますが、足の泥が振り落とされるように嬉しくなります」。私たちの眼下には谷が広がっていて、日の光で暖かく、小鳥たちの囀りが良く響き、復活祭で花々が飾られていました。

(一九一四年四月十七日)

百十二 無人島 (L'ÎLE DÉSERTE)

無人島で凡そ百人の遭難者が生活し、全員が思い思いに労働し、生産の一部を給料として受け取る作り話は、余りに現実からかけ離れているように見えます。しかしながら、それは事物のメカニズムを部分的に解明する再現方法としては正しいものです。私たちの現代社会は複雑で、隠された歯車があります。それは自動販売機と良く比較出来ます。あなたは二スーで一枚のチョコレートを手に入れますが、どのようにしてコインが落下してチョコレートが出てくるのか私たちに分かりません。市場にもやはり隠されたメカニズムがあります。私は爪ブラシを買ってお金を支払いますが、それが如何に作られているのか全く分かりません。労働者のために私のお金が幾ら支払われるのか、運送屋に幾ら支払われ、露天商に幾ら支払われるのか分かりません。それ故に先ずは私の周りのこの広大な市場から眼を離します。そこはお金持ちが貧乏人を養っているように見えます。それでも私は、私が想像する無人島に思いを馳せます。そこは、もしも誰かが舶来物を着たり、舞踏会用の靴を履いたなら、そうでない人々は反対に最早お金持ちでなくなるのは極めて明白です。

私が先ず大変単純にこれらの考えを続けて行くと、その結果は大変に驚くべきこととなります。私はこの地球上でも、他の人々と一緒に遭難したのも同じであると突然に理解します。というのも人間が働かなければ、私たちは死ぬことになるからです。そうです。耕作された碁盤目の畑となっている日の当たるこの谷と同じで、もしも農機具で大地を掘り起こさなかったなら、大変に早く沼地や茂みになるしかないのです。そして、世界中のどんなお金も役に立ちません。幻獣レバイアサンを思い出しましょう。アナーキストのプルドンを生んだように無数の顔を持った残酷なこの幻獣が、もしも働くことを止めれば、最早食べることが出来ないのは明白です。そして労働による生産部分に対して権利を持つ世界に、決して豊かさも利益もないのがサラリーマンです。ところで私が今日生産した物は、交換することで食べたり、着たり、住んだりするのです。他の遭難した者たちに何を言いに行くのでしょうか。周りには農民たちがおります。彼らは皆に正義の規範を厳格に説明します。「働かざる者食うべからず」。

しかし、お金持ちの一人が別な風に物事を考えます。彼は野生の大地に生まれたと決して信じたくないのです。そうではないのです。大地の上で、反対に良く畑いじりが行われ、彼は金や銀と交換して、あらゆる種類の物が沢山与えられます。私たち人間は、西洋すもも人間も決して区別しません。彼は大地からの生産物を数えます。労働者たちは畑を耕作して、種を蒔き、収穫します。そして彼は単に他人の労働で生活するばかりでなく、無駄にも誇示してこの労働を浪費する名誉を手に入れ、本来義務としてあるものが危険に瀕します。彼は車を運転して行き、そして戻って来ます。彼は道路を使います。貧乏人たちを豊かにするために踊ります。多分、十日間の労働に匹敵する婦人用帽子は、一度か二度しか使われません。お金を遣わなければなりません。そうです、殆どお金を遣わないお金持ちをけちと非難するまで、労働する者たちは逆上して何も見えなくなります。沢山の人が一緒にいる時、その計算は訳が分からなくなります。

しかし、私はこのメカニズムを解明したいのです。その数字は何にもなりません。私たちはこ

の地上にあります。人間の労働による生産品で生活しています。一人ひとりが作ることを覚え、そして生産品を生産品と交換します。その時、パンのことを考えないで踊る軽薄な女性たちを人は鞭で打ちたくありません。結局彼女たちは沢山のものを手に入れますが、何も身に付けていません。彼女たちを鞭で打つのでしょうか。あなたは笑いたがっています。人は最も珍しいものを作って彼女たちに与え、既に彼女たちを解雇しているのです。

(一九一四年四月二十日)

大変に毅然たる様子で議論に戻ることは良くあります。「私たちは、要求されるなら戦争の技術者と同じ人数の人間を与えるのだ。彼らは必要と判断する限りは守るのである。一人ひとり仕事ぶりで判断される。これらの人間たちは、上官の評価で多くの人々の中から選ばれる。彼らは自分たちの中では折り合い、そこで私は彼らが提案することは合理的であるとの結論を引き出さなければならない。私には、全てが雰囲気であれば、提案すべきことは何もないのである。彼らは一週間とか十か月で容易に私に反駁する。良い議論とは何であろうか。私たちは、最も学識が深く行動的と評価された人々を選んだのだ。私たちは彼らを信頼するに違いないが、彼らは全くの法螺吹きである」。

以上は、大変に堅固な話のように見えます。しかし、検証してみましょう。先ずこれらの見事な合理的考えによって、指物師は自分の好みによって窓を私に作りますが、私の好みではないことに気付かなければなりません。しかし実際には、仕事の精巧さを知らなくても、私は望んでいることや価値を維持するものを大変上手に説明することが出来ます。その認識がなければ、私は少し頑固にならなければなりません。そして一人ひとは、その道の専門家が先ず自分で気に入ったものを提示するのを良く知っています。それは専門家の習慣であり、最も困惑も少ないものであり、最も多くのものを彼に齎します。もしも煙突から煙が出ていたなら、自然なことですが私は暖炉職人に次のように言うことは出来ません。「私は煙の出ない煙突が欲しいのですが、そうでなくてもこの大きな煙突は見た目に汚いです」。その時は暖炉を変えるか、煙突そのものを変えなければなりません。それは議論されるべきです。しかし、決して私に全てを決めさせない専門家を私は信用しません。他の例を挙げます。余りに不規則で形の悪い土地に私が建物を建てるのを決めたところ、建築家は私にそれしかない唯一の計画と思わせて、そんなことはないと私に決して思わせてくれません。私は選択するために実現可能な幾つもの計画を見たいのです。同様に私には、二年間の兵役を基礎と見倣して、それに関係する集団やそれを完全なものとする予備隊の組織と教育と共に、防衛のための完全な計画を、戦争の専門家たちに要求する権利があるように思われます。というのも結局のところ彼らの組織はその上で、防衛のためだけの人間を与えていないからです。国力はそのようなものです。作戦を行うことが出来る人間は沢山あります。職務上の仕事や監視に一所懸命であり、書類や病室の仕事にも一所懸命です。実際の人数は、誰も変えることが出来ないで定められたものです。ところが私は、その建築家に言ったことを軍人にも言います。「全ての兵力を行使する方法は一つだけでないのは確かです。あなたは職業軍人制軍隊と最初の交戦で対峙します。それは完成された一つのシステムであり、私は好都合と不都合を理解出来ます。しかし、今は他の可能性を考えて下さい。結果に引きずられて行く国家という大きな組織全体を直ちに使うことが重要です。この作戦には空想的なものは何もなく、将校たちはあなたのように学習し実行しましたし、その判断は実現可能です。そして私は、国民が好きです。あゝ、あなたは私に奉仕するのであるから、私はこのシステムを詳細に学ぶようにあなたに命じます。勉強が果てしないのは確かです。しかし、あなたはそこから逃れられません」。

困難は理解されます。彼らは、この強力な命令に応えません。指導者でいたいのです。そして、もしも或る高級将校が国民側に頭を下げたなら、彼は最前線に着く前に潰されて仕舞います。要するに上からの命令は、急進的な〈共和制〉に対して偏見を持ちます。軍事国家のシステムに対しても同じです。そして十年前から省庁や代議士の弱体化によって、この連合は分離派を排除して力を持ちます。つまりそこに問題点があります。ドレフュス事件以後、人々が上手に選択してもそれは真実ではありません。私たちは、弱体化と投げやりの十年間に税を払って来たのです。以上は、二年間兵役法に戻すには、継続した堅固な努力によってしか実現出来ない理由であり、そのことによって急進派は必ず良い地位を手に入れ、恐ろしく力のある連合に反対して阻止し、彼らが必要とする協力者たちにも反対して阻止するのです。そして現在では、彼らを失敗させているのです。

(一九一四年四月二四日)

私はあらゆる種類の〈威厳〉を敵にする、と敢えて言わなければなりません。大きかろうと小さかろうとです。私は遠くからでも嗅ぎつけ、反逆します。外国の君主については、如何なる意見も持たないようにしています。しかし私が、生来からの権利で統治する人を容易に敬意を表さないことには変わりありません。何でも殆ど私を理解しない人々は、私の本心はアナキストであると言っています。しかし実際の私は、何もアナキストではありません。従うことは私には容易ですし、楽しくもあります。もっと正確に言うなら、それは尊敬することであり、崇拜することでもあります。それは私がこの世を一番良く愛していることです。しかしそれは全て、決して一人前になりたくない人への尊敬と服従が結合されたものでもあります。そして私が見るに、〈威厳〉とはまさしく権力を持つ前に、既に尊敬させたいことに他なりません。勿論、私にとってそれら二つは命令になっています。

もしも私が人生の偶然から将校になっていたなら、服従することは何も辛いものではありません。階級を表す金モールの数に相応しく誠実になります。単純なものは最早何一つないと私には思えます。しかし決して私は、將軍夫人に対して尊敬という特別の意味合いを持った感情を示すことが出来ませんでした。そこから私が怒りっぽい人間で大変に不公平な人間に分けられたのです。私が服従した時は、最早何も無いに違いありません。私が与える例は何でも悪いと言われますが、国民がもしも尊敬するなら、服従するように覚悟をさせられるからです。しかし、それが与えなければならぬ大変に良い見本であると私が逆に信じるのは、崇拜することなく従うからです。それは共和制そのものです。

どんな暴君も、尊敬することなく服従することを人々が知らないことから齎されるように思います。というのも決定することが権力の必要性であり、その様にして命令を確保し理解するのは、難しくないからです。服従することの必要性を理解した大部分の人々は、その人に服従することが合理的であるという結論を引き出しますが、それは大変に間違っています。暴君自身は大きくても小さくても、合理的でありたいということによって見分けています。如何なる役所でも構いませんが、その中で一人ひとりは、そんな経験をしています。管理職者は納得させたりします。しかし同時に議論し感じさせますが、その言い方から反論を許さない議論と見ています。この移ろい易く精神的な権威との混合は、私には醜悪に見えます。もしも同意することを人が望むなら、私を自由にさせて置かなければなりません。それは合理性という価値によってしか行動しない、理性による方法の絶対的自由です。しかし、もしもそれが命令とするなら、命令とはそういうものなのでしょう。

私があちらこちらで読むのは、強い政府でなければならないということです。「私は望む」と言うことを覚えます。それは少しも私を驚かしません。「私は望む」は全く素っ気なく反論もなく、少しも気持ちに届きません。しかし実際は「私は望む」と言うことを覚える暴君は一人もおりません。それは全ての人々が称賛することを求めますし、それを強制し、そして単に従わない者ばかりでなく、反対する者も監獄へ入れます。結局、暴君は愛されたいのです。おべっか使

いが一番嬉しいのは、王の望みに合理性を発見することです。従ってその一致は、精神的服従によって行われます。そして王は望む必要がなくなります。誰もが、何時も次のように言いたがる指導者とか局長とか視察官とかの小さな王の声を聞くことが出来ました、「私はあなたに決して命令しない。只、私の意見を言うだけだ。私の望みは、あなたが自分で整理して決めることである」。そして彼らは慇懃に強く次のように答える者には、〈間違った精神〉であると大変良く言います。「私は決してあなたのものではありません。もしあなたが賛成して欲しいなら、あなたは理性的になって下さい。あなたの権威は何の価値もありません。でも、もしあなたが言うことを聞いて貰いたいなら、命令する勇気を持って下さい」。その繊細な宮廷人は全く反対に、望みで一杯なのです。次のように言える時の人間は、殆ど神のようなものです。「私を喜ばすことは、彼らにも同じ真理になるのです」。

(一九一四年五月一日)

昨日、或る若者が私に言いました、「私は自分自身に、知的退廃という重大な徴候を観察しています。〈正義〉について何か書こうと思っても、そうなのです。何故ならその点について言うために、私は沢山のことがあると思っていたのですが、突然に麻痺したように感じ、前段の展開を飛び越えることさえあります。私は、他の方法で他のことをやろうと思いましたが、結果は同じでした。呆然とさせられました」。

それに対して私は答えました、「私はそれが何か知っています。〈正義〉という水の中で泳ぐ時、不可避免的に一種の海のシビレエイに触れることになります。沢山の泳ぎ手を大変奇妙に麻痺させ帯電させるこの魚はそう呼ばれています。隠喩ではなく、あなたは価値あるものに触れたのであり、全て痺れています。一人ならず経済学者は、この驚くべき結果を体験しました。最も美しい水の中に、判断が先ず純粋な正義を掴む様に見える疑問の中に、間違えることもなく、不正とは対照的に幾つもの見本が大変容易に認められると私は言いたいのです。というのも不平等がもし契約を変えたなら、二つの対照の間に不平等ある度に、先ず不正があると私は良く分かるからです。例えば一方が他方の者よりも賢者であるが、お金持ちであるか期待される良い地位があったなら、必要性や情熱に支配されることもありません。取分け一方が知っていることを隠しているために、他方が知らなければならない時には交換した物に関して不正が起こります。例えばもし私が、月経になるとびっこをひくようになるのを知っている馬を売りたいと思うなら、そのことを言わなければなりません。もし私が間違った釣銭を渡したなら、そのことを言わなければなりません。それは全く単純なことであり、それが理屈であると思います」。

彼は言いました、「その通りです。しかし、それらの決まりは公平であろうとする時にしか当て嵌まりません。契約当事者たちの良心的意志によって両者の平等が想定されていて、交換した物の価値が平等でなければならないことが更に求められます。でも如何にしてそれが分かるのでしょうか。時価や一般的習慣によるのでしょうか。そこにあるのは失われた正義です。私は習慣と模倣に戻ります。その値段は捕らえどころのない価値に入れ替わりますし、何とでも書ける私のペンは磨かれて光っているかのようです」。

私は言いました、「幾何学者のように行わなければなりません。経験を事物のように測る幾何学者は、先ず経験を外へ投げ出さなければなりませんし、合理的で理性的な虚構について思考しなければなりません。というのも現実の商業世界において、それらの値段は少しも価値に対応していないからです。価値は人間社会の中でしか平等でなく、百人いるとして百人全員が労働しているなら、殆どそれと同じ力となり、殆どそれと同じ便利さで生活します。その上、百日分の消費においては、例えば百人分の生産物を使い尽くすようになり得る方法で仕事を分け合えば、黒字にはなりません。今ではこの仮説で全ての人々の労働で、全ての人々が生活していると言わなければなりません。彼らは平等の価値の物を交換し、一人ひとりの生産物は正しい値段でお金が支払われます。そしてこの純粋に想像上の経験が、現実の経験を唯一明白にすることが出来るのです。しかし、それはショー・ウィンドーや定価という光輝く世界では何と弱く、ぐら

ぐら揺れた光なののでしょうか。そこでの欲望は、常識が模倣されている間に、餌食となる弱者の上に飛びかかって行きます」。

(一九一四年五月四日)

友人のジャックが私に言いました、「哀れな友よ、軍人法についてのあらゆる微妙さが、兎に角も色々と言われています。もしも私が良く考えたなら、「私は反対票を投じる」と言う連中を別にすれば、この法律については三つの意見があります。そのうちの一つは、それが正しいと思う人です。法律そのものが正しいとする人であり、全く単純な人です。何故なら、それは軍隊の独裁者や軍人精神という強い権力者たちの気に入られて、〈共和国〉の中での大変化の兆しに賛成する人々であるからです。彼らはそのうちに、四人の兵士と一人の上等兵が代議士たちには目もくれずにいるのと同じことを願うようになります。大変に明白な意見であることに気付いて下さい。そして、例えばもし将校になるなら、そしてもし〈共和国〉が教会でなく市役所で結婚したり、子供たちに洗礼を施さない権利を保証しないことに気付いたならば、時々共和主義者だった人間を理解して下さい。というのも彼らは心に言うからです、「この喜劇は何が良いのだろうか」。結局のところ短気になるとか、歳を取ることに良く腹を立てるとか、胃酸で酸っぱくなるかです。悲しい意見です」。彼はパイプに火を点けました。

彼は言いました、「しかし、そうではない残りの二つの意見を見てみよう。そこまで来るのに私たちが力づくであったことを後悔している人々がいます。ところが彼らが言うには、それは決して私たちのせいではないのです。外的状況がそうであればある程、法が保持されます。私たちはそれを愛するとは言いません。永遠であるとも言いません。待たなければならない、と私たちは言います。何を待つのでしょうか。ドイツが最先端の兵力を減少させることでしょうか。全てが上手く行き、地平線の雲はもうない、と大使たちが告げることでしょうか。フランスや外国の大新聞が、最終的な保証として世界平和を認めることでしょうか。それは殆ど言われていることでもあります。お金持ちたちが税の申告をしようとする時には、私たちも富についての税の申告をします」。

友人のジャックが言いました、「そして三つ目の意見です。私たちは、他の人々が言う三年兵役法を愛しません。それは労働者には重すぎます。共和主義的で平和的な思想の後退だと分かります。しかしその問題は、換言すれば私たちの自由、つまり〈共和国〉そのものを保証出来るか否かが分かることです。ところで、それに替えられる制度を、何故あなたは私が考えることを望むのでしょうか。それを考えるのは参謀部です。参謀部が決定するから、私たちも決定するのです。我が友よ、この三つ目の意見は独りで自分に戻って来るものです。三年兵役法は、選挙で有権者の意見が何も反映されておられません。国家防衛という体制が君主制となったのです。それは国民に相談されるのか否か、主権在民なのか否かを知る問題であり、結局のところ国民に相談することなのです。結局、私たちはあらゆる人に言われます、「選びなさい。しかし、殊の外あなたには選択がない。そのことに何と答えるのでしょうか」。

友人のジャックよ、何を答えるのですか。私たちは、共和国の大使や将校や大臣にそれを望んでいるのです。統治するのは急進主義であり、「フィガロ」紙の承認を求めているのではありません。結局のところ、この横柄な未成年者を温和しく慣らす新たな努力が、支配する国で行われ

るのです。というのも私は、三年兵役について断固た意見を持っていないからです。しかし、それらの意見のうちの一つを私が持ち、そして確固たるものにするのは、それらを私たちに命じた政府であるということです。

(一九一四年五月十日)

百十七 選挙について (SUR LES ÉLECTIONS)

その理論家は私に言いました、「敵の一人が他の人の相当の票を持って行って仕舞うなら、全ての選挙の投票を良く注意して考えて下さい。そして、人は選挙次第であると言って下さい。多くの市民は確信も実際の平衡感覚もなく、突発的で予測のつかない彼らの動きから、どちらか一方へ小舟を傾けます。選挙は少しも合理的ではありません。郡選挙では全てが偶然に委ねられ、全てが不安定です。最早、比例代表制をもってしても同じです。そこでの五十人の票が、一万票を無効にすることは出来ません。そしてあなたが、良く支配していると思っている状況は非常に不安定であると良く分かった時、そうなるのです」。

私はこの理屈を取り上げました。何故なら先ず、一種の痕跡を生んでいるからです。しかし、それは少なくとも想像力によるものであり、恰も子供の指一本で、正確に均衡を保っている二つの大きな塊を動かす力を負っているのでびっくりするようなものです。少なくとも多数の票で選出された状態の時、不満に思っている人々は叫びたくなります、「もし私たちがそのことを知っていたなら、あちらだ」。でも、そんなことは決してありません。虚構でしかありません。寧ろ、彼らの一人ひとり、あちらがあるために投票したのです。もう一人です、車は発車しています。何故なら、その他の全ての人々は、そそのかされているからです。

人々は言います、「しかし実際には、結果を変えるためには五十票を移すだけで十分です」。そうです。しかし、恣意的な方法ではありません。あなたが結論を下したがるように、行き当たりばったりでもありません。彼ら五十人の市民は、他の多くの人々と一緒に行動するしか力がありません。二者選択のうち各々は、やはり偶然に任せる訳には行きません。如何なる結果になろうとも、熟考した判断や、変わる事のない結束や、安定した興味を表します。もしも二つの陣営に完璧な平等があったとしても、力にくじで決められると決して言うてはなりません。何故なら、両党派の各々は人間を選んでいたのであります。

恰も選挙が本当の戦争であったが如く、そして半分より一票でも多ければ当選した者が、半分より一票でも少ない市民たちを奴隷状態にしたがるが如く、余りに多くのことが考えられています。虚構なのです。事物が持つ力によって先ずは候補者の一方とか他方の者が、事の成り行きによって支持者や反対者に共通した関心を示しています。それは関心の関連性によります。何故なら市民の半分が全て好意を示す計画は決して存在しないからであり、他方の半分が全て反対する計画も決して存在しないからでもあります。

しかし取分け、事の成り行きで当選した者の精神の中には、仲裁が行われます。というのも対峙している投票用紙による二つの軍隊しかなく、それらは市民による二つの軍隊ではないからです。当選者は、支持者や反対者の全員を良く知っていません。同様に、彼が知る少ない人数の人々にあっても、何人が儲けたり損をしたりしないかは決して確信を持っていません。そこから彼は両方に少しは留意し、機嫌を取るようになりますし、大変に良く起こることですが、友人よりも寧ろ敵の機嫌を取ります。あらゆる場合において、そして特に多数の人々が弱くなる時、それらは過去への選挙であるよりも寧ろ、未来への選挙が当事者への投票を左右させます。世論

や関心という継続したゲームは、人生と同じです。というのも実際の意志は、何も一度で説明されないからです。あらゆる作品は注意力と、継続する努力と、試行と正確さと修正を前提としています。そして、それは最良のものを私に理解させてくれる比例代表制に機械的で正確なものがあるということですが、それは決して良く分からないものであり、決して有機的でもありません。それは実際の人生でも国民の実際の意志でもないのです。

(一九一四年五月十三日)

正義についての善意ある論文を読みながら私は、この美しい言葉が曖昧であると何度も理解したところです。交換や取引の公平さについては大変早く了解されますが、平等は厳格な法であり、分配の公平さに沿って幸福と一緒に広められており、一人ひとりの長所に沿って幾つもの役割を調整するのが望まれます。微妙なこの思想を齎したのはアリストテレスであり、平等な事柄を不公平に扱ったり、不公平な事柄を公平に扱うや否や、そこには少しも正義がありません。建築家と石工が同じ賃金を望むのは、決して正義ではないと思って下さい。正義の問題で回り道をしながらも、私たちは大変明瞭な計算を探求し、曖昧さや混乱は直ぐに頂点に達します。そして、ここに働くのは〈能力〉以外のものではなく、古いイマージュに従ってその均衡の中で剣を捨てます。

熟練の建築家は私に言いました、「私には計画があり、お金を貰わなければならない。何故なら、あなたが望んでいることだけを私はやる事が出来るからだ。だから私は、あなた次第なのだ」。けれども石工たちは身を粉にして働きます。一人は皆のためにあります。人は選択しなければならないだけです。しかし建築家は、私次第です。譲らなければなりません。建築家は私に或る強制を行使します。私が何処まで欲望を追って行くかを知ることが重要になります。更にもっとはっきり言うなら、私が自分の肖像画を所有するために偉大な画家を探すか否かです。彼は、私の目的に繋がったロープのようにして、私の望みを試みてくれます。彼のどんな働きも、そのロープを切らないでいられる限りは優しいのです。

私が土地を囲わせるとか、望むように囲うのを妨げるとかする一隅を望んだ時、他の人は私の望みにも飛びつきました。彼は、私の目的に繋がったロープを引っ張ります。私は必然的に譲ります。そして私は多分、彼には公平さがないという考えを持ちますが、少なくとも私はそうではなく公平があると考えます。しかし何時も物事を鋭く見ていたプラトンは、私を無視し嘲笑します。何故なら他の人や私自身を奴隷にして仕舞うこの欲望の力を、私は正義と呼びたいからです。反対に、欲望に合わせて値を決める精神の弱さを、不正義と呼ぶなければなりません。そして他人はもっと強い権利を眼に見えて良く行使するけれども、それでも私には欲望し、狂うまでに自分の欲望を満足させ、幸せそうに戯言を言う人を見た時に、不正義の本当の顔が現れて見えて来ます。その人は言います、「私はお金を払わなければならないので払いますが、私はそれを手に入れてみせます」。この暴君の身のもだえは、他人の冷淡な力よりも醜いものです。

暴力は、それを行使する者によって、そしてそれを我慢する者において何時も不公平ですが、副次的な意味においてはより親密で愛されていることにもなります。そのことは、真面目に考えれば十分ですが、贅沢の報いは一種の偏執とか、少なくともお金を遣う者のうちの欲望が勝っていることを前提としております。それは狂ったような競売のように、支配者の目には決して公平がないと理解するためなのです。

公平とは理性です。あるいは公平は決してありません。そしてこの側面から私は、わざと不公平になります。というのも不公平の真意は恐らく私が大変に高い賃金を払っていると信じる偽り

の自由の中にいるからです。何故なら、私の欲望は沢山あるからです。良く観察して下さい。稀有なことです、狂ったようにお金を払う者たちも、一般的には安い市場を探しています。欲望と力にあるこのドラマによって、何時もその中には戦争があり、その外にも戦争があります。そこから贅沢の報いや飢饉の報いは、先ず私たちの心の中に横たわっているのが分かります。

(一九一四年五月十五日)

好かれなければならない上司に指図される限り、上司と同じ考えを持っている振りをします。そして上司の考えは何時も、威厳と力を増して広がって行きます。しかし、自分の気持ちを隠すのは嫌なものですし、辛くもあります。私は、隠して置かなければならない考えが私の中で動き回ったなら、決して平静ではありません。私はその位置を判断し測ります。それは、私が気にかけることがなければ、窒息して死んで仕舞うものです。気に入られたいと思う人と同じ意見であるべきであると思うことは、何と快いことでしょうか。この満足感と諦めは、多くの誠実さに似ています。そこにあるのは暴君の結果の一つであり、人はそのことを十分考えません。何故なら犠牲者がいないからです。彼らはいわば〈証言する〉のであり、独房では自分の考えを言えない者たちである、と理解して下さい。そして考えを変える者たちもいます。しかし毅然として生き生きした考えを守り抜くことが出来る者たちは稀有であり、決して口に出してそれを説明しません。

以上は上司の近くで生活し、上司の見方で生活する者の理由ですが、上司に依存しても追い返されたり取り替えられるかもしれない者です。あるいは上司の誠意で昇進なら、何でも受ける者です。こうした訳で、前者は殆ど何時も上司の考えを持っています。又、決して自分を奴隷と思いません。反対に、自由と思っています。そして彼が説明出来る考えを正しく身に付けるのは、彼の考えを説明して自由を感じるためです。

他の種類の部下たちは良く見捨てられ、大変に遠くへ追いやられます。彼は道具でしかなく、物でしかありません。誰も彼を愛しません。かくして、坑夫は株主の生活を手に入れて、去って行きます。あるいは熟練の労働者になり、その道の専門家として働きます。彼は最早、諂（へつら）う必要はありません。あるいは公務員になりますが、その仕事は難しく、郵便局員のように容易に先が見えています。取分け階級が試験とか実際の業務による時は、先が見えています。前者の試験において、部下の意見は自然と上司の意見と反対の考えを取ります。あらゆる場合において、上司の意見から独立したものになります。そして上司は、何故その様な考えを持っているのか容易に理解するようになります。例えば贅沢に生活している者たちの理由は、贅沢に消費する者たちが労働者を生活させているからである、と考えていることです。将軍は、もっと武装された部隊でなければならないという意見を持つ理由でもあります。大臣は、全ての人々に言うことが出来ないという意見を持つ理由です。そして結局のところ、レースや万年筆や花や宝石の商人は、フランス民族主義者のモーリス・バレスの票になります。これらの考えは広く導かれて行きます。

それらの考えは、機械化された生産から避けられなくなった結果で、上司から奴隷を遠ざけます。上司は、奴隷が上司の目から遠く離れて敢えて思考することを予想しませんでした。そして奴隷の労働がより難しくなっていくにつれて、この自由は、集中した多くの原因によって発展します。労働が別々に分業された都市圏に求められる時でさえ、自由は発展します。その時、労働者は道徳的に見捨てられますが、知的には自由です。この見捨てられた孤独と、自由によって

定められたプロレタリアの集団は、日々大きくなります。それは避けられない結果であり、お金持ちには理解出来ません。何故ならお金持ちは、周りにいるおべっか使いの意見しか理解しないからです。「皆が良く考えるが、選挙には困ったものだ」。でも彼はあの世へは行きません。

(一九一四年五月十七日)

勇気を持たなければなりません。勇気のない力とは何でしょうか。そして、もしも昔の議会に足りないもの、特に急進派に足りないものを尋ねられたとしたなら、それは十分な勇気であると答えなければなりません。個人的なものでなく、全体としての勇気です。恐怖もありますし、自分も守らなければなりません。恐怖に対して身を守らなければなりません。左派の人々は誰もが大変に知的です。殆ど知的すぎると私は言います。そこから、彼らの知的な文化と力強い魂の間には均衡がない、と私は言いたいのです。それらは観念の鏡になっています。

無宗教への移行は自然な結果です。対象に沿って精神を十分に適合させなければなりません。従って信じ込む習慣を無くさなければなりませんでした。しかし信仰のない人々の精神は、磁石のように外部からの最小の変化でも狂うことがあり得るのも本当です。彼らは長く待ちます。彼らの一人ひとは強く主張しますが、大変に敏感です。余りに敏感すぎる意見の記録計のような人を私は恐れます。彼らは直ぐに一つに纏まり、その結合によって生じるものを全て求めます。要するに、一人ひとは他人からの影響を自分自身に沿って測ります。他人に対して行使した行動のことを十分に考えません。人間の習慣が教えるものは、それが形づくるものが外部的な現実を十分に反映させていることです。

事物の管理人とはそういうものです。しかし、ここで重要なのは人間世界です。そこでの一人ひとは通常の状態に責任があり、会計もしています。それは一人ひとりが良く似た意見に支配されて一つに纏まっている幻影そのものです。

この宿命的なメカニズムによって、一つの集団は何も望まなくなります。人間のどんな指導者たちもそのことを良く知っています。彼らの議論は何時も同じです。一人の人間は、他の人々を仮定した意見によって行動します。統合するのを提案するのは彼であり、犠牲を求めるのも彼です。そして、その様にして直ぐに遊びに行く勇気も意志も無くなって弱くなります。受け入れられる機会があるものしか提案しないこと、それは実際に悪い規範です。譲歩することによって始めること、それは実際に悪い策略です。

一人ひとりの決断を邪魔する主なものは、他の人々にも重荷になり、動かさなければなりません。何時も余りに敏感で、ぶんぶんいう音やざわめきによって余りに今もあり続けるこの観念は、その他の観念を忘れさせますけれども、大変に単純であって余りに明確です。それは一人ひとりに共通の意識を生み、指導したり高めたりするのに貢献することになります。要するに堅い意志は、推し測ったような知性が不可能と判断したその歩調を、屢々容易に生みます。

誰も敢えて平和を主張しないこの立派な理性に代わって、誰も敢えて平和を主張しなかったなら、私たちは悲しむべき悪循環の中に陥って仕舞います。「希望せず望みもしない人々の中で、私は望んだり希望したりすることが出来るのでしょうか」。もしも彼らがこの考えと同時に全てのものを持っていたなら、如何にして脱出出来るのでしょうか。取分け、始めのうちは英雄的な執拗さと、一人ひとりの大きな努力がなければなりません。しかし、私は純真な代議士たちが次のように言っているのを聞きました、「この議会は何をしているのだろうか」。おや、純真

なら、今は望むことが重要で、知ることはありません。

(一九一四年五月十八日)

(次章へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ V

【2014年10月号】

<http://p.booklog.jp/book/88657>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88657>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88657>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ